

# 知らなかった日本との結びつき



元コロombo日本人学校（現真庭市立檜邑小学校）

荻田 治

2007年3月から2010年3月まで赴任したスリランカ。行く前も帰ってからも「どんな国ですか。食べ物は何を食べていますか。」という質問が多く、「紅茶と宝石の国です。」とか「毎日カレーを食べています。」と答えています。

しかし、実際には私自身がスリランカ（「S R I LANKA」とはシンハラ語で、「聖なる光輝く島」という意味。）について知らないことがたくさんあります。特に文化や経済などにおいて日本との結びつきについてはスリランカに赴任して初めて知ったことばかりです。

スリランカといえば、昔セイロンといい紅茶の国ということくらいしか知りませんでした。滞在してみると、いろいろな機会に日本との関係を聞くことができました。その中からいくつかを短く紹介します。

まず、今日のスリランカが大変親日的であることを象徴している出来事です。

1951年、J・R・ジャヤワルダナ蔵相（後、スリランカ第2代大統領）はサンフランシスコ講和会議にセイロン代表として出席し、「日本の掲げた理想に独立を望むアジアの人々が共感を覚えたことを忘れないで欲しい」と述べ、「憎悪は憎悪によって止むことはなく、慈愛によって止む」という仏陀の言葉を引用して日本に対する賠償請求を放棄する演説を行い、日本が国際社会に復帰する道筋を作ったということです。

第2次世界大戦中、日本軍の飛行機がスリランカ東部の町を爆撃したのにもかかわらず賠償を求めませんでした。（日本軍がスリランカまで行っていたことにも驚きです。）

次に、日本が輸入している紅茶は、2006年の統計によると量では84.3%、価格で51.5%がスリランカからのものです。量では圧倒的に多いのに価格では半分ということは、スリランカの紅茶は安いものが多いということですが、その理由はおわかりでしょうか。ちなみにスリランカではもともとコーヒーを栽培していました。それが冷害のために全滅してしまい、そのあと栽培するようになりました。



毎年の日本語検定試験には1400名程度のスリランカ人が受験をしています。コロombo市内にある笹川ホールを拠点とした日ス文化協会が中心となって日本語教育に取り組むほか、2つの国立大学には日本語学科があります。また、日本語スピーチコンテストもあり、優勝者には短期日本留学が贈られます。大変日本語学習に熱心な国の一つと言えるでしょう。

家内が、台所用品に磨きをかけようと亀の子たわしを赴任荷物に入れましたが、コロombo市内でもたくさんのたわしが売られていました。日本から持ってきたものを見るとスリランカ製と書いてありました。（哑然）

日本の中古車がそのまま走っていることにも驚きます。「〇〇スイミングスクール」「〇〇温泉」などと書かれたままの車です。実にスリランカ人は、リサイクル、リユース上手です。

以上、まったく縁がないように思えたスリランカでしたが、実はそうではないのだということに気づかされた3年間でした。しかし、スリランカは、最近では内戦終結に向けた武器・資金の提供元でありインド洋に進出を狙う中国との関係が接近しています。そのため、日本との関係が薄くなってきているようにも感じます。石油の確保のためのシーレーンに位置するスリランカと日本がもっと親密になることを願っています。

